

第17回

森遊びを通じて、遊びの本質を 発見できるようなプログラムを

茶原真佐子さん（木文化研究所）

エコのもりセミナーの人気プログラムである「森遊び倶楽部」親子を対象にした森の入口プログラムを企画してきた茶原さんとディスカッションを深めた。



茶原真佐子

愛知県生まれ。インテリアコーディネートを学び、建築設計事務所で図面作製、模型作りにたずさわる。その後、木文化研究所のスタッフに加わる。1999年より、エコのもりセミナーの親子対象のプログラム「森遊び倶楽部」の企画・運営に関わる。

昔と今の遊び方の違い

昔と違って今は遊び場がなくなってきている。お金を払って参加できる遊び場はたくさんつくられてきたが、池や川、裏山、作業場、空き家、空き地などは「危険」とされて立ち入れないところが増えた。

同時に遊べる時間もなくなってきている。受験戦争の低年齢化、塾通いの増加、テレビゲームなどに使われる時間が増え外に出る時間が減った。

昔はできたが、今はやりにくくなった遊び

- ・虫採り・凧あげ、ターザンごっこ・ホタル狩り
- ・基地づくり・ナイフづくり・木の実採り・草つき
- ・古井戸探検

今もできるが昔ほどやらなくなった遊び

- ・メンコ・馬跳び・ベーゴマ・けん玉
- ・おしくらまんじゅう
- ・ままごと・お医者さんごっこ

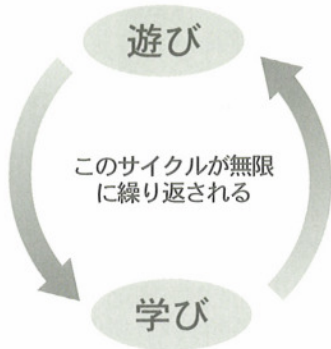
昔の遊びは近所付き合いや仲間とのコミュニケーションを図る場でありルールを学ぶ場であった。たいていの遊びは自分だけで考察し、アレンジしていった。大人のやっていることをまねることで発見する学びと遊びもあった。「ままごと」「焚き火」など。

こういう要素を持った「遊び」をつくりだすことが森遊びのプログラムでは可能である

森遊び

- ・知る →カエルの気持ちになる、キノコを知る、森に暮らす動物に学ぶ
- ・職人技を学ぶ→左官屋になろう、大工になろう、土偶をつくらう
- ・つくる →森で食事をつくる、織物をつくる、草木染め
- ・感じる →森でアート、森で活ける、森のいのちとおどる

森遊びの本質とは？



- ・ 森には無限の遊びを生み出す大きな許容力がある
- ・ なくなってしまった昔の遊びが持っていたたくさんの要素を含んだフィールドと言える

森の中で子どもを「管理」するのではなくつろいでクリエイティブな遊びをすることが大切

躍動感溢れる時間空間では

森遊びプログラムをつくる上で

エコのもりセミナー「森遊び倶楽部」を企画する上で大切にしてきたこと

- ① なるべく地元のゲストと組むことで、ありきたりのものではない新しいプログラムをつくった
- ② 季節にふさわしいものを心がけた
- ③ 森を楽しむ、森に親しむことを大切にしたい
- ④ 親子や参加者同士で協力しあえる要素を盛り込んだ
- ⑤ チラシは目を引く楽しいものにした

これからは

1. 単発ではなく四季を通じて過ごすことができ森の手入れをし続けるなど、長期間かかわることができる森遊びを！
2. 最近は1人遊びが増えてきているが、森ではみんなとコミュニケーションをとったり協力して遊べるものを
3. その土地そのフィールドの特性やそこにある「道具」などを活かしたものを

求められる人材

森遊びを通じて、遊びの本質を体験／発見できる場をつくれる人

昔遊びにあった「時間」「空間」を森の中でこそ取り戻すことができる。そんな時間、空間をプロデュースできる人が必要

森ではあまり子どもを管理しすぎない

昔の遊びにあった遊びの本質を再び作りだせる

地域の人、地域の道具、地域の技をつないで遊びをつくれる人